

『菊ちんの新遊嬉』(一)

これは Alcott 女史の Little Men 中のある部を出したのであります。

〓 英文學に現はれたる子供(三十)〓

岡田みつ

「菊ちゃん、如何したの。」

「男の子が仲間へ入れて呉れないの。」

「何故入れてくれないの。」

「女の兒にはフット・ボールは出來ないつて。」

「出來ますとも。伯母様はやつた事がある。」と言

ひながら、伯母さんは昔遊び跳ねる時の事を思ひ出して笑つた。

「私も出來ると思ふんですよ。御兄様と私とで先によくやつて、面白かつたんですもの。だけど今はさせて下さらないのよ。他の男の子が笑ふもんで」と、菊ちゃんは兄の無情を怨むでゐる氣に見えた。

「まあね、兄様にも無理はないんです。御前と兄

様と二人の時は差支ないけれど、十人から上の男兒と一所では手荒すぎて不可けません。何か別に一人で遊んだら宜いでせう。」

「獨りで遊ぶのはもう厭になつてしまつたの。」と菊ちゃんの聲は沈んでゐた。

「ぢきに伯母様が一所に遊んで上げますよ。今は大急で市内へ行く支度をしなければならぬから。御前の母様の所へ行くのですから一所にいらつしやい。そうして若かしたら暫く泊まつて來ても宜い。」

「母様や赤ちゃんには逢ひたいんですが、やつぱり此家へ歸つて來た方がよい。兄様が必然淋しがりますもの。私も此處が好きよ。」

「兄様の傍でなくては暮らせないのね」と伯母様は此少女が只一人の兄を此上ないものに思ふ心をよく會得して居るやうであつた。

「それはさうよ。兄妹ですもの」と菊子は元氣付いた顔をした。

「伯母様が支度をする間に何をして遊びます」。

「何をしませう。人形や何かもう飽きてしまつたから、伯母様何か新しい事を考へて頂戴な」。

と菊子は、戸の取手にぶら下つて何の氣乗りもしないやうな風をした。

「何か新工夫をしなくてはならないから、少し時間がかゝりますよ。だから一寸臺所へいつて御晝食の御馳走は何だの見ていらつしやい」と伯母様は勧めた。一かうでもして暫時可愛い、厄介物を遠ざげやうと思つて。

「エシヤ(料理掛りの女中)が五月蠅いといはなければ見にいつても宜いわ」と菊ちゃんはぶらぶら臺所へ出掛て行つた。

五分程して、菊子は元氣で戻つて来た。手に捏粉の一塊を持つて、鼻の先へ饅頭粉を塗付けて「伯母様! あの御菓子を製造へてもよう御座いますか。エシヤは怒らないで、拵へても可いつて云ひましたよ。面白さうだわ。ね、伯母様宜いでせう」と一呼吸に言ひ續けた。

「それは何よりな。お、宜いとも、何でも好きなものを御作りなさい。いつまでしてゐても宜いんですよ」と伯母様はほつと安心した。

菊子は走り去つた。伯母は用事をしながら何か新しい遊びは無いかと智恵を絞つてゐたが、急に妙案でも浮んだと見え獨り笑んで、箆筒の抽出しをハタと閉めながら「出来るものなら一つ爲て見やう」と獨語した。

新案の遊びは如何なのだか誰も知らなかつた。

唯伯母はよい事を思ひ付いたからそれを買ひに行くのだと菊ちゃんに話して愉快さうに眼を輝かすので、菊ちゃんは好奇心を起こして市内へ行く途

中いろ／＼問ひ質したが、伯母様は要領を得ぬ返事ばかりして居た。實家に着いてから菊子は赤坊と遊んだり、實母かあさまを嬉しがらせたりしてゐる間に伯母様は買物に出て行つてしまつた。やがて妙な格好の紙包を澤山もつて歸つて來られたので、菊ちゃんはもう見たくて／＼直ぐ伯母様の宅へ歸ろうと言ひ出した。併し伯母様は泰然たうぜんと構へて、菊子の母様と話し込んで、笑つたり何かして居られた。菊ちゃんは如何して伯母さまが秘密を母様に打明けなすつたか分らなかつたが、母様は承知の様子で「さやうなら」をする時に、母様つては、

「菊ちゃんや。大人しくしてね。伯母様を買つて下すつた玩具でよく御稽古なさいよ。それは面白くて利益たぐになる遊びだから。伯母様が一所に遊んで下さるなんてほんとによい伯母さまだねそんな事は嫌かたひの方だのに。」と言つて伯母様と二人で大笑たふしひをなすつたので、菊ちゃんは益々譯が分らなくなつた。

菊ちゃんは伯母様と二人馬車で搖られ／＼歸る途中、何だか馬車の後部うしろのあたりで、ゴト／＼音がしたので忽ち耳を敬て、

「何でせう。あれ」

「新しい玩具さ。」と伯母様は眞面目で答へた。

「何で出來てゐるの。」

「鐵やブリキや、木や眞鍮、それから御砂糖に、

鹽に、石炭に、その他いろ／＼のもので。」

「まあ變ね！ 色は？」

「いろ／＼様々の色があるの。」

「大きいの。」

「大きい處もあるし、さうでないところもある。」

「まあ、何でせう！ もう待ち切れない。何時見せて下さるの。」と菊ちゃんは自烈つたさうに跳

ね上つた。

「明日ね。御稽古のあとで。」

「男の子も一所に遊ぶの。」

「否、御前だけ。男の子だつて見たがるでせうし

少しは仲間へも入りたがるでせうが、入れても入れなくても御前の勝手でよろしい」。

「では兄様が入りたいといつたら、入れて上げやう」。

「皆入りたがるに定まつてゐる。殊に肥大さん(子供の異名)なんかと」。言つて伯母様は、さも可笑しきやうな眼付きをして、膝の上の角張つた一包みを撫でた。

「一寸私に觸らせて頂戴」。

「一寸でもいけません。すぐ當てゝしまつて詰らなくなるから」。

菊子は落膽した。包紙の孔からピカ／＼光つたものが一寸見えたので、忽ち満面に笑みを湛へた。

「とても、そんなに長く待てないわ。今日見る譯に行かないんですか」。

「どうして／＼。ちやんと並べたり、いろ／＼取付けたりしなければならぬから。それにす

つかり飾り付けてから菊子に見せますと伯母様はテデー伯父様に約束して來たのですもの」。

「テデー伯父様が御存じの玩具ならきつと良いのにちがひない」。

「そうですね。テデー伯父さんが一所に行つて買つて下すつたのでね。あれこれと撰り取るのに随分面白かつたんです。あの伯父様は、何でも上等の大きな品ばかり買ふのだと仰つてね……

こんど、御出の時はよく御禮を申さなければいけませんよ。あんな好い伯父様はありやしない。態々あんな可愛い御料……おつと、も少しで言つてしまふところだつた」と伯母様は大

事な語を途中で飲み込んで仕舞つて、この上饒舌ると檻樓を出すとも思つたらしく勘定書きを調べ出した。菊子は諦めたといふ風情で、腕を組んで「リョー」といふ字の付く遊びつて何だらうと考へ／＼静座してゐた。

家に歸り着いてから、出て來る紙包を一つ／＼

熟と見てゐたが別けても一つ重い大きいのをフランチ(従兄に當る男兒)がすぐ二階の遊び部屋へもち込んで行つた此上なく不思議に思つた。其日の午後は遊び部屋に何事かあると覺えて、フランチが金槌を使つてコン／＼叩くしエシヤが階子段を上つたり下りたりするし伯母様は前掛の下へ種々の物を入れてチラ／＼往來するし、幼い貞ちゃんだけは室の中へ入るのを許されてゐたが、いくら尋ねても舌がよく廻らないので、たゞ笑つてバババといつて「きさい／＼」と教へてゐた。

菊ちやんはもう氣が狂ひさうになつた。その興奮が男兒達の中にも傳染して、皆急に伯母さんに御手傳ひませう／＼と申込んで來た。それを伯母さんは、先方が菊ちやんに使つた語で一々斷つた。

「女の子は男の子と一所には遊べないでせう。これは菊ちやんと伯母さんの遊びですから、御前方に用はないの」。

さう言はれて男達は詮方なく引下つて、急に菊ちやんを呼んで、石彈、馬ごつこ、フントボール、何でも好きな遊びに入れてやると親切慰撫に言ふので、菊子は如何した譯かと無邪氣な心に只呆れてゐた。

男兒達の好意の御蔭で、その日もどうかかうか過ぎて菊ちやんは早く床に就いた。翌朝は菊ちやんが御稽古を非常の意氣込みでしたので、伯父様は毎日新しい遊びが發明されて欲しいものだと思つた。十一時に御許可が出て菊ちやんだけ勉強室を出た時に今こそ菊ちやんが新らしい珍妙の遊びをするのだと一同が思つたので、室中に一つの動搖が漲つた。

子供は皆菊ちやんが走り去る姿を見送つたが中でも菊子の兄は其の方へ心を奪はれてしまつて、サハラ沙漠は何處にあるかと問はれた時に、なさけなさうな聲で「遊び部屋に」と答へて一同に笑はれた。

伯母さま、もう御稽古が済みました。私一分も待てない」と。菊子は伯母の室へ跳り込んだ。

「ちやんと出来てゐますよ。さあ、いらつしやい」と。伯母様は貞ちやんを片腕に抱き、片腕に縫物を抱へて二階の室へと先へ立つて歩いた。

遊び部屋の入口に立つて、菊子は見廻した。

「何にも見えないわ」。

「何か聞こえるでせう」。伯母様は言つた。――小さい貞ちやんがさつさと室の一方へ進まうとするのを、着物を引張つて引止めて。

菊ちやんはバチ／＼といふ音と、鐵瓶が煮立つやうな音を聞いた。その音は張出し窓の前に垂れてゐる窓掛の後から出たので、菊子はさとそれを引開くとアラ！と言つたぎり悦びの眼を見張つた！

張出し窓の三方に棚様のものが出来てゐて、右手には大鍋、小鍋、鐵鉈、長柄鍋の種々が掛けてあり、右手には、食事道具と茶道具が一式並べて

あつて、中央の臺には料理用の竈が据ゑてあつた。玩具的の役に立たない竈でなくて眞の鐵製の、大家族の一人形の家にも、もう十分間に合ひさうなのであつた。何がよいとて、その竈の中で眞實に火が燃えて居て、小さな鐵瓶の口から湯氣が立つて蓋が跳りを踊つて御湯が中でブク／＼言つて居るのに越した事はなかつた。窓ガラスを一枚外したあとへブリキ板を一枚箆め込んで其に明けてある煙突の孔から、眞の煙が眞實の通りにスツーと出て行く處が何とも言はれぬ程に宜かつた竈の傍には、薪と炭とを入れた小箱が、置いてあつて、少し上部の處には、塵取や小箆が下げてあつた。而して菊ちやんが平常遊びに使つてゐる卓子の上には、買物用の籠があつて、椅子の後部には白前掛と被り物とが引掛けてあつた。日は射し込む、火はバチ／＼いふ、鐵瓶は湯氣を立てる、金物が光る、陶器は行儀よく並んでゐる……之ではどんな子供でも心の奥まで満足しさうである。

菊ちやんはアラ！と一聲言つたぎり、眼ばかり働かせて、次から次へと物品を見て行つた揚句に伯母様の顔を見た。急にそのそばへ駆け寄つて抱き付いて

「伯母様！ほんとによい玩具よ！私ほんとに此處で御料理をしたり、御客様をしたり、掃除したり、ほんとの火を焚いたりしても宜いの？ほんとに嬉しいわ〜。どうして、伯母様お考へ付きになつたの」。

「御前が、エシヤの處で御菓子拵へたいと御言ひだつたので思ひ付いたのさ」と伯母は菊子が飛び去りさうに跳ね廻るのを押へながら「エシヤだつて、さう、始終臺所で御前を遊ばせてもくれないだろうから、小さい竈をこゝへ置いて伯母様が御料理の仕方を少し教へてあげたら、面白くて利益にもなると想つてね、方々の玩具店を駆け廻つて探したのですよ。處が、中々物が高價で困つてしまつてもう止めやうかと思つた

處へ、テデー伯父様に御目に掛かつたから、これ〜の譯でと御話したらば、それでは加勢をすると仰つてね、一番大きな竈を買ふのだつて強情を御張りになつたり何かしてそれから種々な小さな細かいものまで皆買つて下すつたの」と言つて伯母様は、その買物の可笑しかつたのを思ひ出して笑つて居た。菊子は、

「まあ伯父様に御逢ひになつてよかつたわね」と言つた。

「ですから、よく精出して、いろんなものが御料理出来るやうにならなくては。伯父様が時々御茶の御馳走になりに来るから、美味しいものを澤山頼むと仰つて御出でだつた」。

「こんなよい臺所道具は世界中にないわ。私、もうもう一生懸命に何よりもかよりも勉強するの。

「バイ」だの御菓子だの、もういろんなものを拵へても宜いの」と菊ちやんは、片手に御鍋を、片手に火掻棒を持つて、室中を踊り廻つた。

「順々にね。伯母さんが教へて上げるのですから御前は、私の宅の料理女の積りですよ。伯母さんがかうなさい、あゝなさいと指圖をするその通りにすれば、ほんとに食べられるものが出来て、よい御稽古になります。御前はサリーといふ名で、今御目見えに來たところさ、ね。」と伯母様は、早速仕事に取り掛つた。貞ちやんは、指を骨めながら、竈を生き物とでも思ふらしく、珍らし氣に眺めて居た。

「まあ面白い！ 何を先へいたしませう。」とサリーは嬉し氣に、骨身を惜しまず働ささうな態度を見せたので伯母さんは眞の料理人が、この半分も可愛らしく素直だつたら宜かろうにと思つた。「まづ此清潔な被物と前掛を御當て。私や、古風かも知れないが、料理人が小瀟洒した形をしてゐるのが好きだから。」

サリーは早速丸い帽子の中へ髪の毛を疊み込んでいつもは厭がる前掛を、文句もいはずに掛けた。

「それから、そこらを片付けて、新しい皿鉢を御洗ひ。」

サリーは袖口をまくつて、嬉しい歎息を一つして臺所で働き出した。時々「まあ可愛い、麴棒だ！」「まあ可愛い、桶だ！」、「なんて小さな胡椒壺なの！」などと喜悅の聲を上げてゐた。皿鉢が片付いたのを見て、

「さ、サリーや、その籠をもつて買物をして來ておくれ。御晝食に入用の品を書付けにして置いたから。」と奥さんは紙片を渡した。

「どこで買ふので御座います。」といひながら、菊ちやんは、新式の遊びがいよゝ益すゝ面白くなると思つた。

「エシヤの處で。」

サリーは出て行つた。他の子供の稽古をしてゐる室の前を、料理女の服装で通つたので、また室内響動き渡つた。菊ちやんは、笑み溢れた顔をして、兄様の耳元で、

「ほんとに面白い遊びよ。」と囁いた。(つゞく)